

京都大学	博士（文学）	氏名	古庄 匡義
論文題目	ミシェル・アンリの「実践＝哲学」		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、晩年のミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」が、キリスト教の聖書の章句とアンリ自身の現象学とを照合するような形式をとっていることの意義を解明することにある。「キリスト教の哲学」は、こうした形式を取ることによって、この哲学が明らかにする〈真理〉を読者に伝達するための哲学的実践になっているということ、それが本論文を通して示そうとしたことである。

「キリスト教の哲学」は、ヨハネ文書を中心とする聖書の章句と自らの現象学とを照合するかのよう形式で展開されるため、現象学による聖書解釈のようにもみえる。しかし、アンリ自身は、自分の思索が聖書解釈ではなく、あくまで哲学だと主張し、自らの現象学は、聖書が顕わにしている「キリスト教の〈真理〉」と同じ〈真理〉を別の仕方明らかにしていると述べる。このような「キリスト教の哲学」の論述形式には、哲学としていかなる意義や必然性があるのか。

この点について、先行研究は十分に解明できていないように思われる。図式的に分類すると、先行研究は「キリスト教の哲学」を二つの仕方捉えている。第一に、主に神学に軸足を置く研究者たちは、「キリスト教の哲学」をキリスト教の現象学による捉え直しと捉えて、アンリの現象学を新たな神学体系の構築に活用しようとする。第二に、哲学に軸足を置く研究者たちは、「キリスト教の哲学」を純粋な哲学的体系として捉えようとする。彼らは「キリスト教の哲学」から聖書のことばやキリスト教的な概念を極力排除して、純粋に哲学的な体系を抽出しようとする。しかし、どちらの捉え方も、「キリスト教の哲学」が取った論述形式の意義や必然性を解明せず、むしろこの形式を解体して、神学ないしは哲学に還元してしまう。

このような研究状況を踏まえて、本論文は以下の諸点を明らかにしようとした。

- (1) 初期の著作から「キリスト教の哲学」に至るアンリ哲学の展開には一定の必然性がある。逆に言えば、「キリスト教の哲学」は、キリスト教に目覚めたアンリが晩年に突然言い出したことではなく、初期の思想が哲学的な必然性をもって展開した末に到達した哲学的思想である（第1章第2節～第4章）。
- (2) こうしたアンリの哲学的展開は、実はアンリが人生の中で経験した諸実践や実存的変容と連動し、それによって推し進められたものである（第1章第1節）。
- (3) このような哲学展開の終着点である「キリスト教の哲学」においては、その哲学的内容と、哲学的内容を論じるという実践とが深くつながっている。「キリスト教の哲学」とは、聖書の章句とアンリの現象学を照合するという哲学的な実践のことであり、この実践を通してアンリは、自らが見出した真理を体得するとともに、他者にその真理を伝達しようとする。この真理の体得と、真理の他者への伝達を可能にする形式こそが、アンリのいう「キリスト教の哲学」にほかならない（第5章）。

以下、本論文の議論を略述する。

最初期のスピノザ論（「スピノザの幸福」）において、アンリはスピノザの幾何学的体系を、この体系には明示的に現れていないスピノザ自身の幸福の経験や幸福への要求に基づけようとした。このスピノザ論において、すでに幾何学的体系の現れ方と、この体系の顕現を可能にする幸福の現れ方という二つの現れ方の差異が意識されていたが、この二つの現れ方の関係は明確にされていなかった（第1章第2節）。

この二つの現れ方は、初期の二つの著作において、異なる仕方整理された。すな

わち、初期アンリの主著である『顕現の本質』において、現象が現象することの本質が、表象や理論的体系の現れ方である「超越」と、感情や行為における根源的な自己体験の現れ方である「内在」という二つの顕現様態によって二元論的に分類された。そして、超越的な顕現は内在的な顕現によって可能になるものとされ、内在的な顕現に実在性が認められた。また、超越的な顕現は内在的な顕現に何ら影響を与えないものとされた（第2章第1節）。

それに対し、メヌ・ド・ビラン論であり身体論でもある『身体の哲学と現象学』では、「超越」と「内在」という二つの分類を堅持しつつも、身体論という枠組みを生かして内在的顕現を細かく分析した。すなわち、アンリは内在的な顕現を、自己体験を実現する根源的なはたらきとしての「主観的身体」と、この自己体験がはたらく場あるいは実質であるところの「抵抗する連続」とが一体的になっているものと捉え、この一体的なものから、諸力能の総体である「有機的身体」と、諸力能が行使されるところの「絶対的抵抗」の二つが立ち現れてくる、と分析した（第2章第2節）。

このような内在的顕現の詳細な分析を、中期のアンリはさらに展開させていく。すなわちアンリは、マルクスやカンディンスキーを論じるなかで、「主観的身体」と「抵抗する連続」の概念を展開させた。すなわち、諸物に働きかけ、生産物や絵画を生み出すなかで、自らの力能を増大させていこうとする根源的な「生の力」の概念と、この「生の力」が働きかける「生 - の - 世界」の概念へと展開させた（第3章第1節）。

このような思想の展開の結果、中期のアンリは『顕現の本質』の枠組みでは捉えられない事態を扱うことになった。一つは、『実質的現象学』において他者関係を論じる際に登場した「生の〈基底〉」あるいは「生の共同体」の概念である。他者の問題は現象学における難問の一つであるが、アンリは他者の内在的で実在的な顕現に到達する可能性を、自らの生と他者の生の双方を可能にする「生の〈基底〉」のうちに見出した。しかし、『顕現の本質』の枠組みでは、この生の〈基底〉を現象学的に規定することができなかった（第3章第2節）。

もう一つは、『共産主義から資本主義へ』で論じられる「生の自己否定」である。この著作でアンリは、超越的な顕現が、内在的な生の自己否定を促すという形で、間接的に内在的な顕現に影響を与えることを明らかにした。このことは、超越から内在への関係性はないとする『顕現の本質』と真っ向から対立する（第3章第3節）。

このように、『顕現の本質』の二元論的な枠組みのうちに、『身体の哲学と現象学』から中期アンリに至って展開したアンリの思想が収まりきらなくなったとき、「キリスト教の哲学」が登場し、二元論的な枠組みが根本的に変化した。すなわち、内在という顕現様態が人間の生の自己体験と絶対的〈生〉の自己 - 産出に二分され、人間の生の顕現を可能にする絶対的〈生〉が想定されることになった。「キリスト教の哲学」は、すべての人間の生を可能にする絶対的〈生〉の一元論の様相を呈することになった（第4章第1節）。

このような絶対的〈生〉の想定によって問題になってくるのは「超越論的エゴイズム」である。根源的な自己体験によって自らを顕現させる人間の生は、自己自身しか実在的に体験することができないため、絶対的〈生〉を原理的に覚知できない。では、アンリは、なぜ絶対的〈生〉について語りうるのか。アンリはこの「超越論的エゴイズム」を、実践において絶対的〈生〉の自己 - 産出の過程と一体化することによって克服できると考えている。すなわち、キリストのことばを真に聴き取ったときに、絶対的〈生〉の自己 - 産出の過程によって成就する行為、つまり、人間の我意に

よるのではない行為が人間のうちに生じる。このとき、人間の生は絶対的〈生〉の自己-産出の過程に一体化し、絶対的〈生〉を覚知するという（第4章第2節）。そして、この一体化において生ける者たちの生の共同体、「キリストの神秘体」が形成され、この共同性のうちで真に実在的な他者との関係も可能になる（第4章第3節）。

しかし、絶対的〈生〉は、行為や実践において覚知しうるものだとしても、思考や哲学的な論述によってではその実在性に到達することのできないものである。では、「キリスト教の哲学」はいかにして絶対的〈生〉に関する〈真理〉を明らかにしているのか。本論文では、「キリスト教の哲学」を反復的に「書くこと」という哲学的実践が、絶対的〈生〉に関する〈真理〉のアンリ自身の体得と、他者への〈真理〉の伝達を可能にしていると結論づけた（第5章）。

中期の著作、『野蛮』では、知の獲得や伝達は「二重の反復」によって可能になると論じられている。たとえば、他人の行為の仕方の習得は、他人の行為をただ単にまねて、反復的に再現する実践の背後で、その他人が行為した際に体験したパトスを自分も反復的に体験することによって可能になる。

この「二重の反復」の概念に基づいて「キリスト教の哲学」の形式を省みると、アンリはこの「二重の反復」によって絶対的〈生〉の〈真理〉を自ら習得し、他者に伝えようとしていたことが分かる。

アンリは晩年の3著作で、聖書の章句と自身の現象学とを繰り返し照合することを通して、両者が同じ〈真理〉を明らかにしていることを執拗に論じる。たしかに、アンリが明らかにしようとする〈真理〉は言語によって習得したり、伝達したりすることはできない。しかし、アンリはこの照合作業を繰り返すという反復的な実践を通して、「聖書の再読によって自らの実存が変容し、聖書が明らかにする〈真理〉と同じものを現象学的に表現できるようになった」ときに体験したパトスを反復し、この〈真理〉を体得しようとする。さらにアンリは、この照合作業を繰り返し著作に書くという実践を通して、それを読む読者に自らの体験を反復させ、この〈真理〉を伝達しようとする。

したがって、「キリスト教の哲学」には、「アンリがキリスト教を「再発見」して、実存が変容されるほどの衝撃を受けた」という体験が、哲学の重要な構成要素として含み込まれている。そして、この体験を読者に伝達するために、聖書の章句とアンリ自身の現象学との照合という「キリスト教の哲学」の形式が要請されたのである。このような思索は、いわゆる「宗教哲学」の独自の遂行形式を示唆するものとして、重要な意味をもちうるであろう。そのことは、たとえば根源的主体性としての生への関心においてアンリと共通の志向をもつ西谷啓治の宗教哲学と対質させることによって、より明確に浮かび上がるはずである。

(論文審査の結果の要旨)

ミシェル・アンリ(1922-2002)は、二〇世紀後半のフランス現象学において同時多発的に生起した独特の展開を担った一人として知られる。アンリは「現象が現象すること」の根源へと向けて現象学の徹底化を図り、「生の自己触発」という唯一の主題を飽くことなく語り続けた。それだけに、晩年のアンリが突如として「キリスト教の哲学」を標榜し始め、聖書の章句や語彙を大胆に組みこんで自らの哲学を表現し直したことは、アンリの追随者たちをも大いに驚かせ、戸惑わせた。そのため、研究者たちは晩年のアンリ思想を理解しがたいものとして敬して遠ざけることが多く、アンリの死後一〇年以上を経た今も、アンリ哲学の「キリスト教の哲学」化を真剣に受けとめ、その根本動機や必然性を究明しようとするような研究はごく少ない。本論文は、このアンリ研究上もっとも困難な課題に正面から取り組んだものである。

本論文の第一の主張は、アンリの「キリスト教の哲学」は、一九九六年の『我は真理なり』の刊行とともに突如として現れたのではなく、一見同じ洞察の繰り返しとしか思えないそれまでの長い道程においてひそかに進められてきた思索の進展の延長線上に置かれるべきものだという点である。この点を証示するために、第一章から第三章にかけて、主著『顕現の本質』(1963)だけでなく、スピノザ論、メーヌ・ド・ピラン論、マルクス論、絵画論、文明論、資本主義論等にわたる多彩な著作群が、時系列順に読み直されていく。これらの著作は、一見主著の強力な立場を具体的な事象に応用しただけのものに見え、多くの場合そのように扱われてきた。だが、論者は周到な読解によって、むしろこの「応用」の繰り返しによってこそアンリの思索は進展しえたのだということを示す。主著の徹底的内在論は、自らに対していささかの隔たりもなく感得される生に現象世界の「実質」を求めるという方向に独自の道筋をつけたが、それだけでは内在的生をひたすら確認するだけとなり、行き詰まりに陥りかねない。これに対して、一見副次的な著作群でのアンリは、具体的で実践的な事象を扱うがゆえに、生を徹底的内在性へと引き戻して終わりとはいかず、そこで生が自らを増大させたり毀損したりするのはどのようにしてか、そうした展開が繰り返される場はいかなるあり方をしているのか、といったことをさらに掘り下げて考えることを余儀なくされる。こうした観点から、論者は「生-の-世界(monde-de-vie)」や「生の基底(fond de la Vie)」といった概念に着目し、この次元での考察のたえざる再編成こそが、アンリ哲学の展開のひそかな動因であったことを跡づけた。アンリの副次的な著作群への着目は、最近のアンリ研究のトレンドであるが、本論文のように、独自の視点からそれらを一つの流れの中で総合的に説明した研究はほとんどないと思われる。この点は本論文の大きな貢献として、高く評価することができよう。

以上の準備的考察を踏まえて、第四章と第五章では、本論文の主題である「キリスト教の哲学」が論じられる。そこでは、アンリの道程を以上のように見るならば、「キリスト教の哲学」は、アンリ哲学の本筋からの逸脱であるどころか、アンリがそれまで「生-の-世界」や「生の基底」の名の下で追究してきた事象に対して、「理論的に一層整備された」解答を用意するものであることが示される。一枚岩であるはずの生の自己触発を個々の生者のそれ(弱い概念)と絶対的生のそれ(強い概念)に区分し、後者の顕現様式がキリスト論的に語られるのは、そのような意味と狙いがあることだということなのである。

だが、超越論的現象学とキリスト教の語彙をブレンドさせたアンリの異様な言説世界を正当化するには、これだけでは十分ではない。ここで本論文が目指すのは、この時期のアンリにおいて、個々の生の「超越論的エゴイズム」と呼ばれる存在体制が主題化され、それに応じてアンリの生の現象学がそれに対する救済論的な

意味を帯びるに至ったことである。この変容の意味を、本論文は、「キリスト教の再発見が私の実存を変容した」というアンリ自身の個人的告白とあえて連動させることによって究明しようとする。個々の生者の奥底でたえず生起する生の自己触発への還元を挙行し続けるアンリの生の現象学は、個々の生者の「超越論的エゴイズム」を暴露する方向へと深まるにつれて、アンリ自身の実存を変容され救済されるべきものとして示す。その中で「生の基底」たる「絶対的生」が救済論的な意味を帯びて独立した形で主題化されるようになり、その消息を伝えうる唯一の「生のことば」として、アンリは自らを変容させた聖書の言葉を受けとり、それとの「照合」によって哲学を行うという方向へと自らの「哲学＝実践」自体を変容していった。これが本論文によるアンリ哲学の「キリスト教の哲学」化の説明である。アンリ個人の実存の変容という出来事をどのように跡づけるか、その方法論的手続きに関してはやや弱い点があるものの、この問題に対するよく考えられた独自の考察であり、アンリ研究の新たな進展につながる意義深い成果であるといえよう。

さらに、第五章の最後では、アンリのこうした道程から引き出すことのできる宗教哲学の新たなモデルが、西谷啓治の宗教哲学との対比において論じられる。以上のような変容を経たアンリにおいては、自らの実存を変容させた聖句との「照合」において哲学書を「書く」こと自体が、その「キリスト教の哲学」が語る救済を自らにおいて反復するとともに、アンリの読者たちにそれを各自の生において反復することを促すような「実践」となる。本論文は、こうして生起する生者たちの独特の共同性が、アンリにおいて、religioの語源とみなされてきた「再び結びつける」という意味を踏まえて「宗教」として語られていることに着目する。そして、そこから哲学による宗教の本質化でもなければ特定の宗教への信仰を前提とした哲学的思索でもない、新たな様式の宗教哲学の可能性を展望するのである。この最後の論点は、まだ粗削りの主張であり、さらなる洗練を必要とする。しかし、独自の視点からの豊かな可能性を秘めた主張であることは確かであり、本論文で示された論者の能力と研鑽振りからして、今後の大きな展開が期待できると思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2014年10月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。